

# 作中人物の名前をめぐって

——ポエの場合——

島田太郎

## Poe's Choice of Characters' Names in Some Stories

Taro Shimada

Poe sometimes chooses for his characters sets of names that suggest they are closely related and yet often antagonistic to each other, such as Dupin and Minister D—— (“The Purloined Letter”), Fortunato and Montresor (“The Cask of Amontillado”), two William Wilsons, and Bedloe and Oldeb (“A Tale of the Ragged Mountains”), though the last set mentioned is exceptionally unantagonistic. The choice betrays Poe's uneasiness about his own identity. He is always haunted by the dissociation of his own personality because he is, just like August Dupin in his stories, conscious of the coexistence in his own self of “creative Poe” who creates esoteric worlds of poetry and mystery, and “resolvent Poe” who destructs the former worlds by means of his own ratiocination.

It is suggestive that he uses a very rare word “Bi-part soul” twice, no example of which can be found in *The Oxford English Dictionary*. My argument is, I believe, supported by the fact that Poe is at once attracted to and repelled by mirrors. Though he allows only one mirror in his ideal room (“The Philosophy of Furniture”), the use of the word “mirror(s)” in his stories count as many as twenty-seven.

我が国の小説では、登場人物の名前には一どこかその人物にふさわしい名前を選ぶという工夫はあるにしても、あまり露骨に意味のある名前を選ぶことは一ことに明治以降は、比較的少ないように思う。それは、漢字は一字ずつが意味をになっており、その性質上あまりにも直接的に人物の性格なり役割を暗示してしまうおそれがあるからかも知れない。もちろん『吾輩は猫である』とか、山本周五郎の短編など、例外はあげられようが、こうした例からも察せられるように、むしろ露骨に意味がある名前は滑稽に響くことが多いのではないだろうか。ところが西欧文化圏には、ギリシャ神話や聖書など共有している文化遺産があって、固有名詞自体がある連想をとまなうことが多い。アメリカ文学でも、聖書にちなんだ名前として *Moby-Dick* の Ahab や Ishmael, ギリシャ悲劇に由来する名前として *Absalom, Absalom!* の Clytemnestra など、こうした傾向の名前をもった登場人物は枚挙にいとまない。

一方ではアナグラム tradition があるせい、綴りの中に単語が仕込まれており、それが性格を暗示し

ている名前も多い。例えば *The Scarlet Letter* の Dimmesdale [dim+dale] や Chillingworth [chilling] など。このような工夫をこらす作家が多い中でも、ポーほど固有名詞にこだわった作家も珍しいように思う。“King Pest”では Pest-Iferous 大公、Pest-Iential 公爵といった具合に Pest ずくめの人物たちのパーティが描かれている。なかでも傑作は Ana-Pest 大公夫人（Anapest は詩の形式の一つ）で、およそ連想のらち外にあるものが語形の類似からペストと結びつけられているのは、グロテスクでしかもユーモラスである。あるいは“The Devil in the Belfry”の舞台となる町は、時計をそのまま拡大したかのような地形であるが、Vondervotteimittiss（Wonder what time it is を似非オランダ語風に仕立てたもの）と名づけられている。こうした言葉遊びから、“The Narrative of Arthur Gordon Pym”の奸智にたけた男が Too-wit という名を与えられているといった露骨な命名までいろいろな趣向が見られる。

なかでも注目すべきは、一組の人物がお互いに緩やかな意味で鏡像関係にあるということを示唆するような名前を与えられている作品が幾つかあることである。こうした作品群は、管見ではおそらくポーにしかない。“The Cask of Amontillado”の語り手 Montresor（我が宝）が生き埋めにする相手は Fortunato（財産）である。“A Tale of the Ragged Mountains”の主人公 Bedloe は Virginia 州の住人であるが、自分よりもおよそ半世紀前にインドにいた英人 Oldeb の体験したはずのことを経験する。“The Purloined Letter”の名探偵 Dupin は仇敵の Minister D——から手紙を盗み出す。そしてこうした仕掛けの極めつきが、同姓同名の二人の人物を扱う“William Wilson”であることはあらためて言うまでもないだろう。なぜこのような作品群をポーは残したのだろうか。その疑問に筆者なりの解答を試みようとしたのがこのエッセイである。もちろんこれから記すもってまわった解答よりももっとすぐに念頭に浮かぶ答えもあることはあるのだが。それは彼が旅役者の両親を亡くし、リッチモンドの富裕な煙草商アランに養われているときにたびたび念頭に去来したに違いない考えの一つに、自分はエドガー・ポー・アランとなって、つまり正式の養子となって、財産の分与に預かることができるか、それともいつまでも貧しいエドガー・アラン・ポーでいなければならないのかという問いかけがあり、いやでも似通った名前というものに強い関心をもたざるをえなかったという事実である。しかし答えはそれだけではないような気がするのだ。

ところでポーは42年足らずの短い生涯の間に、実に様々な文学ジャンルに手を染めた。詩・評論・そして短編小説。しかもおよそ70篇くらいの一と曖昧に書くのは、短編小説かエッセイか区別しにくいものがあるからだが一作品の中にも推理小説“The Murders in the Rue Morgue”, SFの“Mesmeric Revelation”, 海洋冒険小説“MS. Found in a Bottle”, 風刺小説“King Pest”, 人間の魂の深淵を探る“William Wilson”, ゴシックロマンス“The Fall of the House of Usher”, 理想郷を描いた“Eleonora”, “Landor’s Cottage”, 法螺話“The Balloon-Hoax”など実に多彩な作品が残されている。それ等の短編は、通例はポー自身が短編集につけた *Tales of the Grotesque and Arabesque* というタイトルにちなんで、グロテスクものとアラベスクものという二つに区別されている。しかしここではそれとは違う分類を試みたい。

つまり理想郷—ここでは仮に夢殿と名づけたのだが—を言葉の力で建設しようと志向する作品群と、推理小説、海洋冒険小説、そして人間の心の奥底を探検する小説—夢殿を破壊するものと仮に呼ぶことにする—である。この理想郷についてはプーレが *Les métamorphoses du cercle* <sup>(1)</sup> で指摘

していることがヒントになるような気がする。ごく簡単に彼の所説を要約すると、実用科学を重んじる19世紀の産業資本主義社会の中で、現実生活において貧しく惨めだったポーは、幾重にも取り囲まれた空間を作り上げて、そこに現実生活とは無縁の夢殿を築こうとするというのである。彼が科学をいかに意識していたかは、自然科学が禿鷹のように詩人の胸を餌食にしてその夢を壊し、月もダイアナではなくてただの天球にしてしまい、森からも水からも妖精を追い払ってしまったことを嘆いている初期の詩“Sonnet-To Science”を読めば明らかであろう。

もう一度くり返して言えば、彼は現実を排除して夢にふける理想の空間を、作品の中に築き上げる。その理想郷は、たとえば“Eleonora”<sup>(2)</sup>では、

We had always dwelled together, beneath a tropical sun, in the Valley of the Many-Colored Grass. No unguided footstep ever came upon that vale; for it lay far away up among a range of giant hills that hung beetling around about it, shutting out the sunlight from its sweetest recesses. (p.468)

私たちは熱帯の太陽の下、「色とりどりの草の谷間」で、いつもいっしょに暮らしていた。その谷間には、案内人なしに足を踏み入れたものはなかった。というのも、それは人里はなれた所にあり、大きく突き出た巨大な山々の連なりが周囲をとりかこみ、そのもっとも心地よい奥まった所からは太陽の光でさえもしめ出していたからだ。(筆者訳、以下同じ)

と描写されているし、“Landor’s Cottage”では、森に隠された小さな谷間があり、その中に小川にかこまれた小島があり、その島の中に家が建っているという仕組みになっている。こんな風に幾重にもとりかこまれ外界から隔絶した空間こそ、ポーの憧れるものであった。

If, indeed, there be any one circle of thought distinctly and palpably marked out from amid the jarring and tumultuous chaos of human intelligence, it is that evergreen and radiant Paradise which the true poet knows, and knows alone, as the limited realm of his authority — as the circumscribed Eden of his dreams. (p.509)

事実、人間の知性の耳障りで騒がしい混沌の中に、くっきりと明確に切り取られた思考の円環があるとすれば、それは、真の詩人こそが、自らの権威の及ぶ限られた王国、とりかこまれた夢のエデンの園として知っており、彼以外の者の知りおよぶところではない、常緑の輝かしい楽園なのだ。

という、ジョウゼフ・ロドマン・ドレイクの詩に対する批評として述べた言葉が、このかこまれた夢殿のポーに対してもっている意味をよく暗示している。それは現実世界のさまざまな束縛を逃れ、創作に精進できる世界なのである。

この理想郷の著しい特色は、鏡がほとんどないことである。なるほど“Eleonora”のように建造物の描写がなければ、鏡があろうはずがない。それは当然だ。しかし Landor’s Cottage にも、“The

Masque of the Red Death”のProspero公の大伽藍や“The Assignment”の主人公の壮麗な邸宅にも、詩“The Raven”にうたわれている部屋にも、“The Fall of the House of Usher”のUsherの部屋にも、およそポーの構築した建物にまず鏡の存在は描かれることがない。“The Philosophy of Furniture”では、厚い地のカーテンでくまなくつまれた室の中に、例外的に一枚だけ鏡がかかっている。しかしそれもあまり大きくないもので「その位置はと言えば、部屋の中のふつう腰をかけるどの場所からも、腰かけている人の姿が映らない」ような位置にあるのだ。彼と同時代の作家ホーソンが“Monsieur du Miroir”などという戯文をものすほど、鏡を偏愛していたのとは好対照を示すこの事実を、どう考えたらよいのだろうか。結論を先に言ってしまうと、ポーは鏡を見つめることを恐れていたのだ。鏡の中に自分の分身を見出すことを、自己の分裂を恐れていたのだ。<sup>(3)</sup> オックスフォード英語辞典によれば、ドッペルゲンガーというドイツ語が英語の中で市民権をえるのは1851年のことであり、“double-ganger”という半ば英語化された形でさえも1830年にサー・ウォルター・スコットが使用したのが最初らしい。<sup>(4)</sup> とすれば “William Wilson” (1839) でいち早くこのテーマに取り組んだのは、それが彼の抱え込んでいる内面の問題にいかに深く関わっていたかを暗示していると言えるだろう。

それでは彼の内面の問題とはいったいどんなものなのだろうか。“The Murders in the Rue Morgue”の語り手は、分析力を発揮するDupinの姿を観察しながら「よく二つの部分からなる靈魂 (bi-part soul) という古い哲学<sup>(5)</sup> について瞑想にふけり、二人のDupin—創造的な (creative) 彼と分析的な (resolvent) 彼—という空想に興じた」と言う。しかし面白がることができたのは、語り手だけである。ポー自身は自分の内面にある心の二律背反に苦しんでいたに違いない。なにしろDupinが分析力を発揮してモルグ街の密室を密室でなくしてしまうのとちょうど同様に、分析的なポーは、創造力を駆使して作り上げた世界の欠点を暴き、破壊してしまうのだから。“Eleonora”では先の引用の少し後に続く、

And now, too, a voluminous cloud, which we had long watched in the regions of Hesper, floated out thence, all gorgeous in crimson and gold, and settling in peace above us, sank, day by day, lower and lower, until its edges rested upon the tops of the mountains, turning all their dimness into magnificence, and shutting us up, as if forever, within a magic prison-house of grandeur and of glory. (p.470)

また、西の方へスベルの地に長い間眺めてきた大きな雲が、深紅と黄金色の華麗な様でそこから流れてきて、私たちの頭上に静かにとまり、日ごとに降ってきてついにはその裾が山々の頂きにかかると、それまでほの暗かった山々は壮麗な色合いに染まり、私たちを荘厳で栄えある魔法の牢獄の中に、永久に閉じこめるかのように思えた。

という文章は美しいが、語り手が相愛の女性との暮らしを牢獄という言葉で描写していることを見のがすわけにはいかない。そしてこの言葉が招き入れるかのように、死神がこの谷間に忍び込んでくるのである。なにもこの短編だけではない。Prospero公の建物には赤死病が闖入する。“The Raven”の主人公の部屋にはまがまがしい予言をする大鴉が入ってくる。こんな具合にポーは次々に閉ざされ

た空間を否定していくのだが、それはいつまでも幸福に酔いしれていることができる人間ならばいざ知らず、醒めた目の持ち主には、このような空間は時とともに空気がよどみ、息詰まるように感じられるからである。もう一つには、いつまでもそこで自分一人の夢を紡いでいれば、一般の読者とのコミュニケーションが絶たれてしまうことを、ジャーナリストとしてのポーがよく知っていたからでもある。いままで夢殿という大げさな言葉を使ってきた。それでは先ほど言及した“The Murders in the Rue Morgue”の密室はどうなのだ、という反論が聞こえてきそうな気がする。だから急いで説明をつけくわえなくてはなるまい。あの短編の密室は夢殿ではないにしても、そのまま放置しておいては、とうてい読者を首肯させることはできないのだから、閉ざされた空間をこじあける仕事はやはり必要なのである。

これまでポーが作品中に構築した具体的な空間について書いてきた。これを前に引用したドレイクについての批評に当てはめて考えるとどうなるのだろうか。例えば“The Raven”という優れた詩を彼は書いた。「夢のエデンの園」を手に入れた。ところが詩人ポーにそむく批評家のポーは“The Philosophy of Composition”を書いて、この詩を書いたときのプロセスを明快に、あまりにも明快に説明し尽くす。その時この詩は、詩であることをやめて言わば知的作業の対象に過ぎなくなってしまうのである。あるいは“The Fall of the House of Usher”でRoderickが作る“The Haunted Palace”という詩を考え合わせても良いだろう。

In the greenest of our valleys,  
By good angels tenanted,  
Once a fair and stately palace—  
Radiant palace—reared its head.  
In the monarch Thought's dominion—  
It stood there!  
Never seraph spread a pinion  
Over fabric half so fair.

Banners yellow, glorious, golden,  
On its roof did float and flow;  
(This—all this—was in the olden  
Time long ago)  
And every gentle air that dallied,  
In that sweet day,  
Along the ramparts plumed and pallid,  
A wingéd odor went away.

Wanderers in that happy valley  
Through two luminous windows saw  
Spirits moving musically

To a lute's well-tuned law,  
Round about a throne, where sitting  
(Porphyrogene!)  
In state his glory well befitting,  
The ruler of the realm was seen.

And travellers now within that valley,  
Through the red-litten windows, see  
Vast forms that move fantastically  
To a discordant melody;  
While, like a rapid ghastly river,  
Through the pale door,  
A hideous throng rush out forever,  
And laugh—but smile no more. (pp.326-27) <sup>(6)</sup>

6連からなる詩だが、4、5連を省略した。「思考」の王国にこの宮殿は建っているというのだから、第3連の「輝く二つの窓」というのは人間の目をさすらしいということに気がつけば、あとはパズルでも解くような調子で、これは人間の容貌をうたった詩なのか、それでは「黄色の、輝く、金色の旗」とは彼自身の金髪のことか、とすれば詩の前半は正気の時、後半は心乱れた時の様子だろう、「赤い窓」とは血走った目を指すのだと解釈するのは簡単だろう。とすればこれはアレゴリーであり、文学的な価値は低いものと言わざるをえない。

しかし実はこの詩は、短編が発表されるよりも約半年前に、*American Museum of Science, Literature and the Arts* 誌1839年4月号に最初に掲載されたものなのである。その場合、つまり短編小説という枠組みをはずしてしまうと、この詩は簡単に解釈できるだろうか。たしかに人間の容貌をうたったものだ程度の推測はできるだろう。しかし Usher の容貌の変化の描写がないかぎり、後半—引用の最終連—が異常な精神状態の時を描いていると読みとらせることは、無理だろう。その代わり読者の想像力を刺激して多様な解釈を許す象徴的な意味の豊かさを獲得するかも知れないけれども。

ポーのうちの bi-part soulこそが、彼にこうした破壊作業を行なわせるのである。ポーの最大の敵は彼自身だということになる。“William Wilson”で、語り手が仇敵を刺し殺した瞬間に相手と言う「おれの死でお前が完全に自分自身を殺してしまったのだということを、お前自身の姿であるこのおれの姿でよく見るがいい」という言葉は、情況こそ違え常にポーが自らに語りかけ、そして聞いていた台詞だったのである。

最初に提出した疑問、なぜ鏡像関係の人物が登場する作品を書いたのかという疑問に対する答えはもう明かであろう。そしてまた“A Tale of the Ragged Mountains”は例外として、それらの一組の人物たちが敵対関係にある理由も。

1. George Poulet. *Les métamorphoses du cercle*. Paris: Plon. 1961. *The Metamorphoses of the Circle*. Trans. by Carley Dawson and Elliott Coleman in collaboration with the author. Baltimore: Johns Hopkins University Press. 1967. chap.11.
2. 原文の引用は, Patrick F. Quinn ed. *Edgar Allan Poe: Poetry and Tales*. New York: The Library of America. 1984 および G. R. Thomson ed. *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews*. New York: The Library of America. 1984 による。
3. しかも恐いもの見たさの心理からであろうか—ポー自身が説明を求められれば“perverseness”のせいだと答えるだろうが—彼は鏡に惹かれてもいるのだ。ホーソーンが全集で4冊になる長編ロマンスに mirror(s), mirrored という単語を合計しても18回しか使用していないのに対して, ポーは全集版でわずか3冊の短編集—それぞれがホーソーンのものよりも実質的には薄いのに—の中に27回も使用しているのだから。
4. Sir Walter Scott, *Letters on Demonology and Witchcraft*, Letter VI.
5. Bi-part soul というのは古い哲学どころか, オックスフォード英語辞典にも載っていない単語である。あるいはこの当時の雑誌に使用例があるかも知れないと考え, 念のためにアメリカ国会図書館が公開している Memory of America で検索してみたが, ポーの用例しか見あたらなかった。ボードレールも l'âme double とさりと訳しているところを見ると, フランス語にも無い表現ではないかと思える。ただしポー自身はこの作品より以前に“Lionizing” (1835) でもこの単語を使用しており, いかにも彼が自我の分裂に関心をもっていたかを示している。なお resolvent という単語は, 複雑な問題を分析し解決するという意味があると同時に, 存在している個体を溶解するという, まさしく「創造的」とは対立する意味をもっている。後述するように分析的なポーが自分の造りあげた空間を破壊するのも当然なのだ。
6. 次にふれる雑誌初出の時には第1連4行目の Radiant は Snow-white; 第3連最終行の ruler は sovereign, 最終連2行目の red-litten は encrimson'd などかなりテキストの異同が見られる。詳しくは Thomas Ollive Mabbott ed. *Collected Works of Edgar Allan Poe*. Vol.1 Cambridge: Harvard University Press. 1969 を参照。

(しまだ たろう 文学研究科英米文学専攻)